
Karen

TAKE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K a r e n

【Nコード】

N 9 2 4 5 L

【作者名】

T A K E

【あらすじ】

サークルの合宿でチェコへ行った大学生、荒俣 斎と友人は、現地で一人で生きる14歳の少女、カレンと出会う。先日家賃が払えずアバルトマンを追いつかれた彼女の生い立ちを聞いた荒俣は、滞在するホテルへ彼女を泊める。滞在中、カレンが三年程前に強姦されて済み、生後すぐ死んだはずの息子が養護施設で生きている事を知る。事態の真相を探る内に、滞在期間は終了、日本へ戻る。しかし帰国後すぐ、チェコで薬物散布テロが発生し、カレンが第一容疑者に挙げられているとされるニュースが入る。真相をつかみ、彼女

を守ろうと荒俣は単身チエコへ。現地でライターをしている顧問の元教え子、木田良隆と共に警察や新聞社のおつてをあたりながら、事件の解決を目指す。

出発

8月15日。

手を広げると、陽光の手触りをギシギシと感ずるような気がするぐらいによく晴れていて、気温も高い日だった。

新東京国際空港の無機質なエントランスに、俺は立っていた。

俺は大学の二回生で、ボランティアサークルに所属している。毎年外国で合宿をしていて、今年はチェコへ向かう。活動内容とは大して関係無い。ただのレクリエーションだ。まあ第二言語にドイツ語を選択している部員が多いってのもある。じゃあなぜドイツにしないのか？ 最終判断を下す顧問に訊いてみないとそこは分からない。

「点呼取るぞ。荒俣ー」顧問谷田が名前を呼ぶ。

「はい」俺は返事した。下の名前は斎だ。ついでにルックスはと言うと、目は若干奥目で二重、瞳は黒。細めの眉に、髪は短髪で、平均的な鼻の形、唇は少し分厚い方だと思うけど、鱈子唇って程でもない。あと、メタルフレームの眼鏡を掛ける。色は暗めのシルバ―で、レンズとツルの先が繋がっていないやつ。フローティングタイプとか言ったかな。

「神代ー。佐田ー。藤井ー……」顧問谷田は名前を呼んでいく。

「ゼミの奴に土産頼まれたよな。お前何買う？」和久井という同級生が言ってきた。

「名産品だろ」

「水かビール辺りになるか。じゃ俺はあれ、あのあれ……何だっけ？」

「俺に聞かれてもな」

「まあいいや。向こう行つて決める」

「食い物が一番無難だけどな」

「そうだな」

俺を含む集団は飛行機に乗り込んだ。

座席表を見て、自分の席に座った。

「何か持つて来た？」と俺は隣の席の神代に言った。何かというのは、要するに機内での暇つぶしをする道具である。

「そりゃまあ、一応は」彼は言った。

「何？」

「トランプとあと、PSP」

「定番」

「別にいいだろ」

「文句は言つてない」

「そうか。ポーカーやるか？」

「OK。賭けは？」

「無し。旅行でいくら使うか分からないからな。何か賭けるなら帰りだ」

「了解」

俺は前の座席の背中に付いているテーブルを下ろし、通路を挟んだ隣の座席に座っている和久井に声を掛けた。

「強制参加？」彼は言った。

「二人じゃ面白くない」

「まあそうか。ミカちゃんもやる？」隣に座る女に訊いた。中央席の一番向こう側に居る松山という男は既に眠っていた。

ミカは首を振った。「ルール知らないの」

「分かった。それじゃ賭けは……」

「無しだつて。聞いてたろ？ 金無くなつたら困る」俺は言った。

「物質じゃなきゃいい。ミカ、勝った奴の頬にキスしてよ」

「えー？」

「頼むよ。ここ皆寂しい独り身なんだし。俺なんか先月振られたば

つか。チェコに着いたらアイス奢るから」

「うーん……」

「頼む」

「パフェなら」

「OK！　じゃ始めよう。最初から三人だからドローは無し」

神代がカードを配った。俺は一枚もカードを交換する事が無かった。口角が上がるのを堪える。

「本当にいいのか？　荒俣」と和久井。

「多分な」

「じゃ出すぞ」と神代。

俺はフォーカード。他の二人はツーペア。

「あー、クソ」和久井が嘆いた。「こいつの為にパフェ奢るのかよ」ミカの唇が頬に触れた。離れてからも少しの間、その部分は微かに熱を帯びていた。

「もう一回だ」神代はカードを回収して、シャッフルした。

二回目は和久井がフラッシュで勝利。女神のキスを受けて上機嫌だった。

「間接的に俺と頼ずりしたな」俺は言った。

「やめろよ。ゲイかお前は」

「そんなわけないじゃないの」

「オネエ言葉」

「おい、ランプ持って来たの俺なのによ」と神代。

「じゃあ頭撫でてあげる」ミカは手を伸ばした。

「ありがとう。俺ソフトMなんだ」

飛行機のタイヤが地面と接触する振動で、目が覚めた。ポーカーを終えてから、いつの間にか眠っていた。

「着いたか」俺は誰に言うとも無く呟いた。荷物棚に指先が触れそうな程に大きく体を伸ばし、顎が外れるかと思う程の欠伸をした。「起きた？」隣の神代は言った。

「ああ、おはよう」俺は言った。

「おはよう、ね。まあ、一般的には深夜って呼ばれる時間帯だがな」
「は？」確かに外は真っ暗だった。時計を見ると、AM 11:40
とある。

「ああ、時差か」機内の時計はAM 4:17を示している。「猟師
が起きるような時間帯だな」
「だな」

外の様子を表現してみると、何というか、「密度の濃い闇」みたいな、そんな感じだ。滑走路とターミナルの電気以外は全て闇。黒
過ぎるほどに黒い。

「時差ボケが心配だな」
「そうだな」

飛行機が完全に停止して、シートベルトの着用ランプが消えた。
「乗り換えだ。一時間程空くから、少しロビーで休め」寝起きで頭
がボサボサになった顧問谷田が、声を若干詰まらせて言った。

オーストリア、ウィーン・シュベヒャート国際空港。ここからプ
ラハ行きの飛行機に乗り換えである。寝起きで記憶が飛んでいて、
ここでは何を話したのかすら覚えていない。

約五十分後。

先程よりも小さな機に乗り込む。シートベルト着用のサインが出
て、すぐに離陸した。小さい分揺れも大きい。

「どの位で着くんだった？」隣は和久井に変わっていて、俺は彼に
訊いた。

「一時間位だろ。隣の国だし」
「そうか」

目が覚めると、シートベルトはいつの間にか外されていた。

窓外には、早朝のドナウ川が見えていた。

「ああ、起きたか」和久井が言った。

「また寝てた」

「昨日何時に寝たんだ？」

「一昨日」

「あ、そうか。何時だ？」

「三時」

「何でそんな遅いんだよ」

「分からない。荷造りを終えてからずっと目が冴えてた」

「ほう。空港出た後はホテルに直行だったか」

「そうだな」

「バス？」

「と電車」

「疲れるな」

「まあこのぐらいの人数でバス会社から一台チャーターするわけにもいかないだろ」

「まあ……そうだな」サークルの全体人数は二十人程だった。

AM8:23、ルズィニエ空港に到着。

「今からガイドさんのマイクロバスに乗って、三十分ぐらいか。そのぐらいの時間でプラハ市営地下鉄に着く。そこからは列車。空港内でコルナとユーロ、半分ずつ両替してから出発する。迷子になるなよ」顧問谷田の話が終わると、俺達は待合所の椅子から立ち上がった。

空港を出ると、言った通りマイクロバスが止まっていた。俺らが乗り込んで、最後に顧問谷田と副顧問土井が乗り込んだ。

「それじゃ頼む」副顧問土井が言った。

「分かりました」

運転手は日本人だった。

「今回このバスで世話になる、木田良隆だ。君らの先輩」顧問谷田は言った。発車した後も彼らは仲良く喋りながら運転していた。わざわざチェコという微妙な国を選んだのは、この為だろうと勝手に想像した。

出会い

AM9:03、四〇分ほどプラハ市営地下鉄に到着。

「ありがとう、本当に」顧問谷田は言った。

「いえ。今夜どうですか？ 一杯」運転手木田は言った。

「勿論だ」

「近所にいいバーが」

「そうか。それじゃあまた」

「ええ」

余韻を残すエンジン音を発して、バスは去っていった。

駅舎に入って、切符を買った。

ホームに上がって列車を待っていると、十数分遅れのが一台来た。それに俺達は乗り込

んだ。車内では、普通に犬を連れて乗る乗客が数人居た。

その後、列車はヴィシェフラド駅に到着。改札を出て、いい感じの石畳に靴音を響かせて更に十分ほど歩くと、目指す宿泊施設があった。

小さなホテルだが、街の雰囲気によく合っていた。四階建てで、一部屋に四人泊まれるらしい。あまり凝った感じの豪華なイメージは無く、アパートを改築したような印象だったが、俺はその方が好きだった。というかそうでないと外国に来たというイメージが湧かないような気がする。

ロビーに入った。

「部屋の損傷なんかを調べて、報告して来てくれ」と顧問谷田。

俺は自分が泊まる部屋へ、神代に和久井、松山と共に向かった。結構広い部屋だった。向かい合わせに設置された四台のシングルサイズのベッドの脇には、ちゃんと電気スタンドも付いている。

窓外を見てみると、広場が見えた。その中心付近のベンチに、いくらか年下に見える少女が座っていた。時折大人が声を掛けるが、

彼女はそれに大して首を横に振るばかりで、大人は皆両手を軽く広げて去ってゆく。

壁や家具や床の損傷を調べて、ロビーに戻った。

「壁の傷七箇所、民箇の裏板が一部外れていたのと、床に四箇所血痕、合計十二箇所の損傷です」ちよいちよい酷い有様である。誰か死んだのだろうか？

朝食は、それぞれの班のテーブルに野菜のクリームスープ、海老入りの炒飯、ハムサラダ。

炒飯を運んできた人に顧問谷田が「dob r?」と言った。美味いよ、と。

朝食が終わり、部屋へ戻った。皆仮眠をするそうだ。とりあえず今日は、プラハ市街地をグルグル廻る。

俺は飛行機で寝ていたので眠れる筈も無く、鼾を立てるその他の四人を眺めながら、暇を持て余していた。

俺は窓から外を見て暇を潰そうとした。やはり広場が見えた。十歳ぐらいの登校途中の子供達が鞆を携えながらサッカーをしている。その手前では、昨夜の少女が同じ場所に居た。

迷子だろうか。しかし見た感じでは親とはぐれるような歳ではない。ならばどうしてあんなところに一人で……。

何だか気になった。

顧問と副顧問がそれぞれの部屋を廻って生徒を起こす声が聞こえた。

俺はいつの間にか、またも眠っていた。

「おほゆ（おはよ）」和久井が言った。寝起きは変な具合に言葉が訛る。

窓を見ると、少女はもういなくなっていた。

「散策か」俺は呟いた。細い石畳が続くこの町は、好きだ。何とないか、その町の歴史と伝統と魂を感じるっていうか、地面そのものが何かすごく分厚い本の物語、もしくは教科書みたいに思える感じが

だ。

「行くか」神代がそう言い、ナツプサックを手を取った。それを無駄に大きな動きで背中に背負った。

「おう」全員が言った。

ロビーに降りた。俺達が最後の集団だった。

昼食にスマジエニー・ジーゼックとアップルパイを食べて、散策に向かうことになった。

ホテルを出ると、一同バラバラの方向へ向かった。

俺達は最初の角を右へ曲がり、ヴィシェフラド内をブラツと見て廻ることにした。

窓から見えていた広場から少し離れた所に、有名な古城公園があった。中に入ると、ロトウンダと呼ばれる小ぢんまりした礼拝堂があった。

朝居た少女がロトウンダの前で、その親しみやすい素朴な建造物を眺めて立っていた。俺は他の連中が入口付近でピーナッツ入りのチョコを買いに行っている間に、少女に近づいた。

「A h o j . . . (やあ)」と俺は少女に声を掛けた。

「D o b r ? d e n . (こんにちは)」少女はぎこちない声で挨拶を返した。

髪と目は黒、鼻は高いが現地人と比べて薄めの唇。どこか日本人の雰囲気を感じ出していた。服は皺と汚れが目立っていたが、全体的に見れば、美人の部類に入るだろう。

「……日本人みたいだな」と呟くと、

「お母さんが」と、日本語で彼女は答えた。

「ああ……そりゃビックリ、本当」奇遇以外の何の言葉も見つからない。「昨日からずっと居るね？」

「見てたの？」こっちの国訛りの口調で、少女は答えた。

「ホテルがあそこだから」俺は止まっている部屋の辺りを指で示した。

「そうなの」

「どうしてここに？ 家は？」

「一昨日まではここから近いアパルトマンに。でも家賃が長い間滞っちゃって……」

「追い出された？」

「まあ、そう」

「何でまた独り暮らしなんか……その歳で」彼女はどう見ても一五歳前後だった。

「色々と複雑で」

「そう。もし良かったら」

「話したらどうかしてくれるの？」

「大学でボランティアやってるんだ。ちょっとした事なら出来るかも。ほら、募金なんか集めて……」

「家賃に？」

「話次第だけどね」

彼女は一四年前、この町から少し離れた娼婦街の飾り窓で、日本人娼婦である母親の下に生まれた。当然、父親が誰なのかは知らない。客だからだ。一二歳になるまで、その街での生活が続いた。

母親はいつも朝帰りで、殆ど顔を合わせる時間も無かった。ある日突然、母親は少しの金を彼女に持たせ、一人で生活するように言った。彼女はチェコ国内を転々とし、ヴィシエフラドに落ち着いたが、母親に手紙を出しても返事は無く、一方的に関係を断たれてしまった。

「私には、子供も居たの。ある日家の鍵をかけ忘れてて、そしたらそう……悪戯されて。たったの三週間で死んでしまったけどね」

「ああ、あの……その話が本当なら、君は募金を募るに相応しい人物だよ」

「ありがとう。本当の話よ」

「そうか……何か、ごめん。思い出させて」

「いえ、大丈夫よ」少女は元気に言った。

その声を聞いて俺は、この子を憐れんだら駄目なのだと思った。

「俺はまだ一晩しか居ないけど、この国は好きだ。石畳って何だか……風情がある」話題を変えた。

「そうね。仕事は上手くいかないけど」

「歳のせいだよ。最初に訊かれるだろ？」『保護者の許可はあるか？』って」

彼女は頷いた。

「日本に行ったことは？」

「無いわ」彼女は言った。「お母さんはビザが切れてて不法滞在者扱いだったから、国を出ようとすれば二度と戻れないし。私はこの国で生まれたから、市民権があるけどね」

「なるほど……」

ポケットに入れていた携帯が鳴った。海外でも使えるタイプのもを持つているのは、俺と神代だけだ。

「もしもし」ポケットから取り出して、俺は言った。

「今どこだ？」

「公園にあるロトウンダの前。女の子と話してる」

「マジかよ。お前チェコ語出来たっけ？」

「ハーフだよ。日本語が出来るんだ」

『ホー』

「こっち来るか？」

『公園大して何も無いだろ？　これから墓地に行こうとしてるところだ』

「墓？」

『ヴィシエフラド墓地だよ。すげーぞー、足の下にはチェコを形作った偉人の骨がゴロゴロ』

「いいねえ。検死でもしてみるか？」

『俺はブレナン博士じゃない』

「BONESのネタがよく分かったな」

『今数えてみた。お前がグロイ海外ドラマにハマってるって言った

回数は一二回だ』

「ワオ」

『面白いのは認める』

「見たのか。こっちも凄いぞ、ロトウنداちゃんを見てないだろ」

『何それ』

「教会。予習しとけ」

『ヴィシエフラド墓地知らなかったろ。どうする?』

「墓に行くよ。戻ってくるのも時間の無駄だろ」

『了解。先行ってる』

「分かった」

『ハーフの子まだ居る?』

「ああ、ここに」

行かなきゃいけないけど、一緒にどうかと彼女に訊いてみた。もうすぐ仕事の面接だと答えた。

「用事があるって。残念」

『そうか、分かったよ。別にそんなに会いたいわけでも無かった』

「そう落ち込むなよ」

『畜生』

僕は電話を切った。

「じゃあ、またね」彼女は言った。

「ああ。また会える?」

「多分ね。住むところ探さなきゃ」

「それまでずっとあの公園に?」

「分からない。でも、他に何が出来ると思う? 息子が出来た時みたいに、また誰かに泊めてもらう代わりに体を?」

「そりゃ……冗談でもダメだ。何ならホテルに相談してみる」

「悪いわ」

「君の状況が悪いからだ。名前は?」

「カレン・ノリソヴァー」

彼女はにっこりと笑ってそう言った。

「イツキ・アラマタ」俺は手を差し出して握手を求めた。彼女はそれに応じず、頬にキスをした。

「またね」

「ああ」

俺は一人でヴィシエフラド墓地に向かった。観光パンフレットの地図じゃよく分からず、携帯のナビゲートシステムを使った。

「待たせた」

「そんなに待ってない」和久井が言った。「楽しんだか？」

「彼女と？」

彼らは頷いた。

「そんなに楽しい話じゃない。でも、今夜ホテルに泊めるかも」

「マジかよ。どうして？」と松山。

「……孤児なんだ。一昨日アパルトマンを追い出されたと」

「ああ、そりゃ……」神代が呟く。

「本当の話なのか？」と和久井。「そーやって部屋に入り込んで荷物を盗むってやつじゃ」

「そんな子には見えなかった。ホテルの向かいに広場があるだろ？昨日はずっと、そこで野宿してたようだし。それに彼女に聞いた身の上話は……ひどい」

「どうひどい？」

「娼婦街で生まれて、親が稼げなくなって、彼女に少しの金を渡すと捨てた。彼女は泊めて貰った男に犯されて、生まれた子は栄養失調で死んだ」

「……よし、墓を見よう。今は観光だ」松山が言った。

俺達はドヴォルジャークの墓を目指した。彼のものがここで一番大きいらしい。

到着してみると、他の観光客が数人居た。墓というよりも、締め切られた暖炉のような形だ。至るところに大胆かつ繊細な彫刻が彫られている。

「作曲家つてのは……」和久井が言った。「そんなに偉かったのか」
「だろうな」俺は答えた。「この国じゃ昔、音楽を統べる者が国を
統べてたと言ってもいい。だから力を墓にも表す。仁徳天皇陵みた
いなもんだ」

「なるほど」と神代。

「さっき面白い本屋を見つけた」和久井が言った。

「読めないだろ」と松山。

「本以外も売ってるんだよ。雑貨屋だな」

「なるほど」

「行くか」と俺は言った。

「墓は？」と神代。

「大して面白いものでもなかった。ガイドでも付いてたらもう少し
居られるだろうけどな」

「そうかい」

俺達は墓地を出た。

その場所に行ってみると、本屋といっても古本屋で、チェコ語で
はアンティークバリアートと呼ばれている。店頭にウィンドウがあ
って、本じゃなくても色んな品物が並んでいた。その前には、一〇
クラウン均一と書かれたダンボール。つまりほぼ百円。中身は明ら
かにそれじゃ安過ぎるだろうと思える商品ばかりである。

「すごいな」俺は言った。

「何か買っていくか」和久井が言った。

「土産にいい」

「安いしな」

「ああ。それが一番」

ドアには犬と猫の写真が載った看板があり、犬のほうに×印が付
いていた。犬お断りとは奇妙な店だ。チェコの公共の建物はだいた
い犬の入店が許されているのに。そう思って中へ入ると、店には猫
がいた。納得。

学生風の女性が一人店番をしていて、俺達が日本人と分かれると熱心に日本のことについて書かれた書物を勧めてくれた。当たり前だが、全部チェコ語でさっぱり分からなかった。

他にも街を色々見て回り、夜になろうとしていた。俺が気に入ったのは特定の場所ではなく、至る所に張り巡らされた雰囲気の良い路地と、カラフルだが上品な外壁だった。

ホテルに戻り、中に入る前に三人と共に広場へ寄ってみた。

カレンが戻って来ていた。

「また会えた」彼女は俺に言った。

「この子が例の？」と神代。

「ああ。腹、減ってない？」1つ息をついて俺は言った。

「え？」よく聞こえなかったらしい。

「M?? h l a d?」俺は言った。

「……Ano. (うん)」と彼女は一瞬間を置いて答えた。

本屋の向かいにあったパン屋で買った菓子パンを一個あげた。カレンは少し申し訳なさそうな態度を表しながらも、それを笑顔で食べ始めた。

「j a k s e m ? t e ? (調子はどう)?」俺は言った。

「あまり」カレンは日本語で答えた。奇妙な会話だ。

「そうか。まあ、仕方ない。たまには上手くいかない時もある」

「ne. (いいえ)」

「どういうこと?」

「うまくいかないときのほうが多いわ」

「ああ。……ホテルに来る?」

「いいの?」

「受付で訊いてみる。正直、君が一人で野宿してるとこは見られないし、せめて俺達が滞在してる間はね。こいつらも君には逢いたがってたようだし、宿泊費は俺達が割り勘で出す。異論は?」

三人は首を振った。

「よし。じゃあ、行こう」

受付で片言の英語を話し、宿泊客を一人増やせないかと相談する。四人部屋なので、ベッドが足りないとカウンターの女性は言った。「滞在中、交替でソファアーに寝ればいい」神代が言った。「部屋に四人しか入れないって事はないんだからな」

「そうしようか」と和久井。

一部屋の代金に、一人分の宿泊料を追加する事で了承された。

「一泊いくらだった？」松山が言った。

「日本円で六八〇〇円」と神代。

「一人一七〇〇円を三日か」と松山は計算した。

「いや、俺が彼女と出会って、宿泊を提案したんだ。半分は出す」俺は言った。

「いいのか？」と和久井。

「ああ。責任感は強い方だ」

「自分で言うなよ。そういや、顧問には何て？」

「ボランティアなんだ。そのまま伝えればいいんじゃないのか？」

「そうか」

「……ありがとう」カレンが言った。

「気にするな」神代は笑った。「やりたくてやってるんだ」

「美人だしな。歓迎するよ」と松山。

俺達は部屋へ向かった。

「ここだ。荷物は本当にそれだけ？」俺は彼女が肩にかけている白いボストンバッグを見て言った。

「ええ。着替えとほとんど空っぽの財布、ハンカチが二枚。それだけよ」

「そうか。じゃあ、どうぞ」彼女を先に入れた。

彼女は一通り部屋を見回した。「素敵」

「『素敵』だって」と松山。「久しぶりに聞いたな」

「日本の女子は何でも『ヤバイ』だもんな」和久井は自嘲気味に言った。

「良い子だよ」俺は言った。「美人で正直で、スレてない」
「ああ」と和久井。「良い子だ」

夕食の席で、俺達は顧問谷田に彼女の事情を説明した。下心が無いのであれば、道徳的な行いだというのが彼の意見だった。

「下心なんて」と神代。「俺は年上が好みですし」

「そうだったな」和久井が言った。「ああ、俺もです」

顧問は俺と松山を見た。

「心配なら、女子の部屋に行って貰ってもいい」と松山。

「俺は、彼女の過去を聞きました。あれを聞いた後じゃ……彼女に変な気なんて起こせない」

「……分かった。彼女の宿泊を許そう」顧問谷田は言った。「ええと」

「カレンです。カレン・ノリソヴァー」俺は言った。

「カレン、ずっと外に居て疲れたろう。夕食を済ませたら、ゆっくり休みなさい」

「ありがとうございます」カレンは頭を下げた。

夕食は、朝食と同じくチェコ特有といった感じのものだった。クネドリーキ、グラーシュに、トラウト・ファイル・ムニエル。

風呂も済ませてソファーに寝転ぶが、来るまでにネタからか、時差ボケのせいかなかなか眠る事が出来なかった。

ベッドで眠るカレンを見た。窓からは月明かりが指し、長いまつ毛が頬に影を落としている。

滞在期間は三泊四日だ。あと二日経てば、俺達は帰国する。カレンはその後どうするのだろうか？ 彼女は強い子だ。自力でどうにか暮らすだろうし、今までもそうしてきた。それでも関わった以上、責任感と心配は付き纏うだろう。

せめて彼女の子供が生きていれば……。愛する者が居れば、人は生きる気力を失わない。

夜が更けてかなり経ち、蒼い光が窓から差し込んできた頃、僕は眠りについた。

オッドアイの少年

朝食はパンとそれに付けるソースみたいなもの、それにサラダとスープ。至って健康的だ。

冒頭でこの旅行はただのレクリエーションだと言ったが、一部訂正する。

二日目は各班で、その国にある養護施設、老人ホーム等を訪問して、ちよつとしたボランティア活動をする。方法はさまざまだ。ヘルパーの仕事を手伝ったり、ギターを持ちこんでミュージック・セラピーをしたり。

カレンを部屋で寝かせたまま、俺達はホテルを出た。彼女に必要なのは休養だ。荷物を盗む心配も無いだろうと判断した。

トラムに乗ってムーステクに向かう。

ホームと地面の高さが同じ為、電車が来ると埃が目には沁みた。

ガタゴトと鳴る揺れに身を任せて寝る暇も無く、トラムはムーステク駅に到着した。

バロウベク記念養護院は、自身も貧困に喘ぐ生活を送った経験のあるハルムート・バロウベク（〇五年死去、享年八七歳）が創設した。親を亡くしたり、もしくは見つからない子供などを引き取り、社会に適応する教育を行い、並びに新しい育て親を募る活動を行っている。運営資金は、ハムルート・バロウベクの遺産とボランティア連盟の投資によって成り立っている。

受付に行くと、案内役らしい男性が出迎えた。

「本日ここバロウベク記念養護学校の案内を承ります、ヴァーツラフ・ホリーといいます。大学で日本語を専攻しておりました」と流暢な日本語で言った。「どうぞ、こちらへ」

俺達は、廊下を歩き、ある一つの部屋へ着いた。

「ここは〇〇三歳までの子供が集まる部屋です」

ハイハイしている赤ん坊や涎を垂らしてヨチヨチ歩いている幼児が10人ぐらい居た。皆胸に名札が付いている。

その中に気になる名前を見つけた。

ある一人の2歳児（推定）の胸に付いている名札を読んだ。

【Job Nolis】

ヨブ・ノリス。

ファミリーネームを女性詞に変形すると、ノリソヴァーとなる。そう、ノリソヴァー！聞き覚えがあり過ぎる。

いや、名前だけで決め付けるな。ノリスなんて名前、どこにでもあるじゃないか。それに彼女は、息子は三週間で死んだと言った。しかしこの幼児は年齢的にも計算が合うし、鼻や目元の印象がカレン・ノリソヴァーがそっくりだ。ただの思い込みか？

単純に考えれば、子供は実は生きていて、今ここで普通に元気に暮らしているということになる。が、経緯が分からない。

顔の特徴は覚えた。帰って彼女に確認してみようか。

「どうした？」という神代の声で俺は我に帰った。「ボーツとして」

「ん？ ああ。いや、別に」

「……そうか」

「ここは新しい親を見つける為の部署です。中では静かにお願いします」

中に入ると、20人ぐらいのスタッフが電話を掛けていた。

「ファックスで候補のお宅に子供の写真を送り、引き取り手を探し

ます」

なるほど。

「それでは次に行きましょう」すぐに歩き始める。「こちらです」食堂だった。テーブルがあり、カウンターの前には食器とお盆、奥にはなべやフライパンが置かれている。

「まあ、見ての通り、食堂です。こちらは子供達の為のもので、隣が職員用になります」

中はクラスごとに分かれているようで、合同で給食を摂っているような感じだった。

「それでは次に」

進めるの早いな、と小声で呟いた。まあいい。それよりやはり、最初の部屋の少年が気になる。

「やっぱり何かあったな」和久井が言った。「あの子の事か？」

「……ああ、まあ」

「ここで彼女に関係する事って言ったら……息子か？」

「何だ？」と松山。

「カレンの子供かも知れない幼児が」

「死んだ筈だろ？」神代が言った。

「彼女からはそう聞いた。でも、死んでなかったのかも」

「何だってそういう事があり得る？」と和久井。

「分からない。だからさっきからずっと引つ掛かってる」

沈黙が起こる。

「皆さん、早く来て下さい」ホリー氏が廊下の向こうで言った。

「顔は覚えた。帰って、特徴を彼女に」

「辛い過去を掘り返すような事して大丈夫なのか？」神代が言った。

「それに本当にそれが息子だとして、どうする？」

「会うべきだ。親子は一緒に居ないと」

「彼女は今、帰る家も」

「それでも」勿論その事も考えた。「守るべき者が居れば切り抜けられる。違うか？」

「……彼女次第だ」松山が言った。「確認しない事には何も始まらないしな。行こう、ホリーさんが待ってる」

今日俺達はこの施設に、不足している筆記用具を寄付し、子供たち折り紙を教えた。

「あの、ちょっと、聞きたいんですけど」帰り際、俺はホリー氏に尋ねた。

「はい、何でしょう」

「一番初めの部屋に居た、ヨブ・ノリソヴァーって子の事です」

「ああはい、あの子がどうしました？」

「ここに来た時、どんな状況でした？」

「すみません。ここにいる子達の個人情報、口外出来ないんです」

「あの子を引き取るべき人物が知り合いに居るかも知れないんです」

「しかし……」

「なら」何を訊けば手がかりになるか。「……彼を連れて来たのは、どんな人でしたか？」

「母親です」

「歳は？」

「四〇代始め、といったところでした」

多分、それは祖母だろう。

「d?k u j u . N a s h l e d a n o u .」

「A n o .」

夕刻。

ホテルに戻ると、カレンはベッドに座ってテレビを見ていた。

「おかえり」彼女は言った。

「ただいま」俺達はそれぞれのベッドに腰掛けた。俺は彼女の隣に。

「カレン。ちょっと、訊きたい事があるんだ」

「何？」

「……子供の事」

「ああ……」

「大丈夫？」

彼女は頷いた。

「どんな顔をしてたか、覚えてる？」

「猿みたいだった」彼女は笑った。「目が変わってたの。片方が青くて……」

「もう片方は黒。オッドアイだった」

「どうして知ってるの？」

俺は彼女をじつと見た。

「……まさか」

俺は頷いた。

「生きてたの？ そんな」

「今日行つた養護施設に。名前は、ヨブ・ノリス？」

「ええ、そうよ」

「君は彼が死んだと思った時、どういう状況だった？」

「朝起きると、お母さんがヨブは死んだと。それでベッドを見たら、横たわってた。まだ立てなかったんだもの、寝てるように見えたら、寝てたんだ。いつものようにね」

「でも、胸に耳当てたら、心臓の音、聞こえなくて……」

「毛布は？ どけてから耳を当てた？」

「……Ne」

「毛布の中か、服の下に目立たないクッションを仕込んだんだろう」

「じゃあ、あの子は……」

「元気だ。もう歩いてるよ」

「良かった。本当に」

「彼を……引き取る？」

「分からない。返してもらっても、二人で生活するだけのペニー（お金）が」

「……そうだな。とりあえず、生活が落ち着くまでは、ときどき会

いに行けばいい。面会は許される筈だ」

「ええ」彼女は俯いた。「ありがとう」

膝に幾つか、涙が落ちた。

俺は彼女の頭に手を置き、三人を見た。彼らも何も言わず、こちらを見ていた。

翌日。

俺は日の出と共に目が覚めた。

他の者はまだ寝息を立てている。

洗顔用具を持って、バスルームの鏡の前に立つと、目の下に隈が確認出来た。

やるべき事がある。

冷たい水で顔を洗って、少し眠気の残る目をこじ開けた。

剃刀を取り出し、据え付けの石鹸を使って髭を剃った。失敗して少し切って、赤い血が滲んだ。

洗面所を出てふとベッドを見た。そこに居る筈のカレンが居なかった。

ドアが閉まるのが見えて、廊下に出ると、彼女が歩いていた。

「どうした？」

声を掛けると、彼女は小さく肩を震わせた後、こちらを向いた。

「……出てくのか？」

「あなた達には、もう十分良くして貰ったから。宿泊費も出してくれて、子供の事だって……」

「やりたくてやってるって言っただろう。それに払った宿泊費は三日分、元も取れない」

「ごめんなさい」

「謝るな。それに、君の母親の事もある」

「どういう事？」

「君に子供が死んだと偽って、施設に送った。問い詰めるべきじゃ

ないか？」

「どうやって？」

「飾り窓へ」

「まさか……何にもならないわ。それに、子供は施設にいた方が幸せ。私のここに来たら、生きてけないじゃない」

「本当にそう思うのか？」

「どういう事？」

「養護学校に居るヨブぐらいの子供は、ほとんどが一人遊びをしてた。どうしてだと思う？」

「どうして？」

「人との付き合い方を知らないからだ。教えてくれるのは誰だ？」

「……親？」

「そう、親だ。子供は親の背中を見て生き方を知る。あそこは先生は居るが、親として愛する事の出来る相手は居ない。良い育て親が見つければいいけど、それも保障されない」

「……」

「別に無理強いはいしない。けれど、君がもし息子との新しい生活を望むなら、何かしらのアクションは起こさないと」既に無理強いしている気分だったが。「とりあえず、今日は外で朝飯にしようか」

二人でホテルを出た。俺は携帯を取り出して、神代に電話を掛けた。

「もしもし」

『起きたら二人とも消えていて驚いた』

「すまない。ちょっとな」

『彼女とは一緒か？』

「ああ。今日はちょっと出てるから、顧問によろしく言っといてくれるか？」

『おいおい、抜け駆けか？』

「そんなんじゃない。孫を養護施設に送った女に会う」

『やっぱり抜け駆けじゃないか』

「最初に開つたのは俺だ。責任を取るだけだよ」

『早めに帰れよ』

「ああ」

電話を切った。

財布片手に、朝からやっている店を探した。カレンはこの辺のことをよく知っていたので、あまり時間はかからなかった。

「こんなところに入ったの初めて」日本でいうところの定食屋みたいなものだったが、カレンは言った。メニューには、他の東欧諸国と同じように、グラムでの量が記されている。二人とも、Hemenexと呼ばれる、ハムエッグがチェコに入って若干変化したものを頼んだ。

「こりや当たりだ」そう言うと、カレンは頷いた。

食べ終わって、店員を呼んだ。

「Zaplat? m pros? m (勘定を)」

二人で一〇六コルナを支払った。日本円にして、約五〇〇円。かなり安い。

道をひたすら歩いてゆく。

「歩くの、ちよつと速いよ」カレンが言った。

「ああ、ごめん」俺は立ち止まった。「飾り窓に行くとは言ったものの、どの辺りだ？」

「ドイツとの国境が見えるの」

「端の方か」

「でも、今も彼女がそこにいるかどうか分からない」

「母親？」

彼女は頷いた。「かなり歳だもの。娼婦としてはね」

再び歩き出す。今度はカレンの左斜め後ろを。追い越しそうになると肩が当たって気付くように。

国境へ行くには、郊外のここからでは無理だ。まずプラハ中心地に行つて、そこから列車に乗らなければならない。しかし今日の行

動は見切り発進だ。どれだけの期間を要するかも分からない。

とゆうことで、俺達二人は地下鉄の乗り場へ来た。ここからプラハ中心地へ行き、国境への列車のチケットを買う。

列車に揺られている間、カレンはうつらうつらと舟を漕いでいた。朝によっぽど早く起きたのだろう。

プラハ中心地へ到着。チケットを買おうとするが、よくよく考えてみればどこまでのチケットを買えばいいのかも分からない。カレンもヒッチハイクを経由したらしく、列車の経路の全ては頭に無い。ヴィシェフラドへ戻って、調べてから出直す事になった。

俺は再び神代に電話を掛けた。

「もしもし、俺だ」

「どうした？」

「朝、言つといてくれたか？」

「まあ、なんとか。本当になんとか」

「恩に着るよ」

「おう。それで、今どこに居る？」

「プラハ城が見えてる」

「中心地か」

「飾り窓へ行く列車のチケットを買いに来たけど」

「んじゃ、行こ」俺は言った。頷いて、カレンと一緒に歩き出す。

「子供には？」

「今から？」

「見るだけ見たかったら、ムーステクに。どうする？」

「……会いたい」彼女は切実に言った。

「分かった」

再び地下鉄に乗る。ヴィシェフラドで一旦降りて、昨日と同じ道順でバロウベク記念養護学校へ向かった。

「Mr. Horry is here?」受付の女性に英語で尋ね

たが、すぐに内線を繋ぎ、ホリー氏を呼んでくれた。

「ああ、昨日の。どうしました？」

「少し、お願いがありました。ヨブ・ノリスの姿をこの子に」

「昨日言っていた、知り合いの方ですか？」

「ええ、まあ……」

部屋へ向かって、中に入ると、カレンは正味三秒で息子を見つけた。

「Job . . .」カレンは感嘆の息を漏らした。

「確かなんだな？」本当に彼女の息子かどうか、という問いかけだ。彼女はしきりに頷いた。

「そうか。まあとりあえずは、良かった」

カレンは口を押さえた。正直なところ、俺は今まで何の苦勞も無い生活を送ってきたから、彼女の正確な心情を掴み取ることは出来ない。しかし、カレンは今この上無い安堵を感じている事は分かった。

「もう、行くわ」カレンは言った。

「もういいのか？」

「今は見てる事しか出来ないから、あまり長く居ると辛いわ」

「……そうだな」

彼女は息子に見えない所で小さく手を振って、その場を離れた。

「どういう関係ですか？ まさか弟さんとか」ホリー氏が言った。

「親です」

「……はい？」

俺はカレンと、また歩き出した。

ヴィシエフラドの、古城公園に戻ってきた。

「今日はとりあえずこれで終わりだ。また明日、ある程度進めていこう」

「うん」

今日は、殆ど俺が一人でベラベラ喋っていた気がする。やはりこ

うゆづのは余計なお節介とゆづものなのだろうか、自信を無くす。

「なあ、こんな事するのは、嫌か？」

「いいえ。私もお母さんに会いたいわ。あの子から愛を奪ったんだから」

「そうか？」

彼女は強く頷いた。

「なら、良かった」

「おかえり」和久井が言った。「どうだった？」

「うん、まあヨブをカレンに見せに行つて、今日はそれで終わりだ」

「やっぱり息子だったか？」

「ああ。泣いてた」

カレンはトイレに立った。「明日は飾り窓へ。国境近くだ」

「遠いな。谷田がどう言うか分からないぞ」松山が言った。

「まあ、日帰りで帰つて来れるだろう。高校生の修学旅行じゃないんだから、谷田にはあまりとやかくは言わないで貰いたいな」

「でも、親に会つて、それからどうする？」と和久井。

「カレンを家から出した事とヨブの死亡偽装の理由を訊く」

「なるほど」

「そろそろ飯か」和久井が言った。

旅

次の日の朝、俺は携帯のアラームが七周期鳴り響いた後で目を覚ました。

呻きながら電源ボタンを押す。

AM 6:13

松山のベッドで眠るカレンの肩をトントントンと三回叩いて起こした。

「眠い」欠伸をしながら俺は言う。

「寝てないの？」カレンは言った。

「寝るのは寝たさ。三時間程」

「あなたナポレオン？」

「学校行つてないのにどうして知ってる？」

「アルバイト先の学生に教科書を見せて貰った事が」

「そうか」

「歴史って面白いわ」

「ああ。たまには過去を振り返るのもいい」

昨日と同じ店で朝食を摂った後、俺とカレンは今日の行動について相談した。

「どうする？ いきなり国境まで行くか？」

カレンは考えこむ。

「まあどれだけ時間かかるか分からないしな……向こうでどれだけの事が出来るのかも」

「Ano…」と頷く。気分によつて、返事がチェコ語と日本語に分かれる。チェコ語のときは、あまり気分が浮いていない。

「それじゃ、行くか」

今日はトラムを使う事にした。

後ろの方に座って暫く喋っていた。その内、カレンは舟を漕いでいた。彼女もあまり寝ていなかったのだろう。公園で夜を過ごす生活では眠れる筈もないから、その癖が残っているのかも知れない。警察もいるし、この国は真夏でも日中の気温は二三度とかなり過ごしやすいが、その分夜は冷える。冬だと酔っ払って凍死するケースが何件もある。いつもバイトをする前に寝ているのだろうか。

「……辛いな」一言呟いた。彼女が小さく頷いたように見えた。

地下鉄前の駅で降りる。昨日よりも近い地点にある駅だ。キオスクのようなところで乗り換え可能切符を買って、日本と比べて速過ぎるエスカレーターに乗る。下手をすると自転車ぐらいのスピードは出ているんじゃないだろうか。

一回乗り換え、昨日と同じく共和国広場で降りる。

再びトラムに乗って、さらに中心へ。切符はそのまま使え、乗車時間を地下鉄のに重ねて刻印した。このルートは、完全に失敗だった。最初に地下鉄に乗ったら、前のトラムの乗車代が浮いた。軽く溜め息をつく。

ゴシック様式の荘厳な建築物の並ぶ街中を歩いて、とりあえず昨日マップを見て予習したとおり、ホレショビツ駅に行く。

プラハでは基本的に英語が通じたので、駅員に国境に一番近い街までどのぐらいか訊いてみると、三時間ということだった。

「東京〜大阪より長いな……行くか？」

「うん」日本語である。気分が乗ってきたらしい。

日曜チケットなるものを買った。正式名称は知らないが、これだと普通五一四コルナするのが、三六〇コルナで済む。かなりの得で、さっきのルートの失敗もチャラになるというものだ。

列車が出るまで二時間近くあったので、カレンの身なりを整えることにした。

「いいよ、そんなの。悪いわ」カレンは言ったが、俺は手を引いてシヨップへ入った。よく外にいるせいか、彼女は最近の流行を心得ていた。そそくさと買った各アイテムの名前こそ彼女自身も知らない

かったが、選んだ服はとてもよく似合っていた。その後は美容院に行って、髪を整えた。

「見ちがえた」俺が本心からそう言つと、彼女ははにかんだ。ある程度の繁華街を歩いて、五人に一人の男は振り返りそうだった。

「マジだよ。やっぱり素材が良いから似合う」

「d? k u j u . (ありがとう)」恥ずかしそうに彼女は言った。

「そろそろだな」時計を見て、俺は言った。

列車の時間が来たので、俺達はホレシヨビツ駅に行った。途中セカンドハンドのマーケットで菓子を買った。

ホームに着くと、地味な色合いの車体が出迎えた。まだ出発に時間があるのに、小走りで乗り込む。

席に座ると、俺は携帯を取り出してテルに電話した。

「もしもし?」

『出掛けるなら声ぐらい掛ける。どうした?』

「今から行つてくる」

『分かった。気を付ける。娼婦街には厄介な連中も多い』

「了解」

電話を切る。

「いいの? 本当に。今ならまだ……」

「大丈夫だ。言つたろ? やりたくてやってる」

「A n o . . .」

それから彼女はずっと黙っていた。そのうち彼女は、また舟を漕ぎ始めて、俺の肩に頭を乗せて眠りこんだ。中学の時の恋人との出会いのように。止まり木を見つけた文鳥のように。

列車はガタゴトと揺れ、窓から見える景色が流れていく。

飾り窓は、その名の通り街の建物に大きな窓があり、そこから女性が見せて、客と直接交渉して仕事を得る。世界で最も信頼出来る娼婦街であり、近年は観光スポットの一部にもなっている。

外を見ていると、列車が動いているのではなくて、景色が動いて

いるように見える。小さい時に、月の出ている夜に自分が歩くと、月も付いてくるように見えるいた感覚だ。この旅も全て夢なんじゃないかと思ってしまう。しかし、肩にはカレン・ノリソヴァーの頭の重みを感じて、現実なのだと悟る。持ってきた本を読み始めて、また自分が夢を見ている気分になる。そしてまた彼女を見る。そのサイクルを延々と繰り返し続いていた。まどろみと覚醒。

そんなことを考えていると、何だか気が滅入りそうになった。ダメだ、もっとポジティブにいかないとこの先もたない。列車が発車してまだ五〇分、先は長い。

本を読んでるうちに、俺もウトウトとして、眠ってしまった。

目が覚めると、降りる駅は次に迫っていた。

隣を見ると、カレンがいなかった。どうしたのかと辺りを見回す。すると隣近所の乗客も俺を見て、心配そうな顔をして、どうしたのかとチェコ語で尋ねてきたりした。チェコ人には、そうやって気を配ってくれる人が多い。特に右も左も分からないような外国人には、ことさら優しくしてくれる。だからカレンも、今まで生きてこれたのだ。

少ししてドアが開き、彼女が帰ってくるのを見て、胸を撫で下ろした。

「どうした？」俺は訊いた。

「ちよっとトイレに」

「ああ」

「もうすぐね」

「次だからな」

「居るかな、お母さん」

「仮にも親だ。信じよう」

「うん」

窓からホームが見えた。といっても、屋根と柱ぐらいしか無いが、
「行こう」

ホームに降り立つと、列車はドアが閉まり、砂埃を舞い上げながら走り去った。

携帯が鳴った。ひとつ大きく息をついて、ポケットから取り出す。

「もしもし」

『そろそろ着いたか』

「たった今」

『ちよつと待つてくれ、今谷田に代わる』

少し間が空いた。

『荒俣か』顧問谷田が出た。

「勝手にすみません。今、もう国境が見えてます」

『だらうな。お前、そんな遠いところまで行ったら、私じゃ責任取れんぞ。今日中に帰れるのか』

「なんとか」

『絶対だ。でないと単位落とすぞ』

「……はい」

『まあお前が自分で決めた事だ。そううるさくも言えんが、人に流されて行動してるのなら、反省しろ』

「自分の意志です。ご心配無く」

『そうか』

また少し間が空いた。

『荒俣、他の奴も少し心配してるぞ。早めに済ませろよ』和久井が言った。

「まあなるべく善処する」

『呑気なもんだな』

「いつものことだ、気にするな。じゃあ切るぞ」

『本当、さっさと帰れよ』

「分かった」

電話を切った。

「大丈夫なの？」とカレン。

「ああ。でもさっさとしないと単位が危ない。少し急ごう」

「そうね」

二〇分程歩き続けて、俺達は「飾り窓」に入った。
資料の通り、右も左も大きな窓が並んでいた。

「どの辺だ？」

カレンは少し俯いて記憶を手繰り寄せた。

「えっと……この向きだったら、右側の42番目にある建物の3階ね」

「確かか？」別に疑うわけでは無かったが、確認の為に訊いてみた。
「多分」

「名前は？」

「【ユカリ】で通ってた」

「そうか。一応訊いてみるか？」

「そうね」

俺達はその場所の近くであろう建物の、一階にいる二〇代前半と見える娼婦に場所を訊いた。

「Promi?te pros?m.(すみません)」俺は言った。
女連れでこんなところに？ それに見かけない顔ね。売り飛ばしにでも来たの？ 娼婦は言った。

彼はヤポネツよ。用があるのは私だけど、ここで働こうなんて思っ
てないわ

ああ、そう

私はお母さんがヤポネツで、お父さんがチエフなの。ある人の場
所を聞きたくて

そっちの男の子はやらないの？

この人の欲求の度合いなんかは知らないけど、ちょっと教えてく
れないかしら

猛烈なチエコ語の応酬で、二人が何を話してるのかは全く聞き取
れなかった。

四〇〇コルナね

嘘、情報料なんて取るの？

冗談よ。誰を探してるの？

《ユカリ》って人

ああ、彼女は伝説よ。飾り窓唯一のヤポンカだもの。まさか彼女があなたの？

ええ。どこにいるのかしら？

この二つ隣の家の、三〇七号室よ。娼婦は顎で右方向を指し示した。まだやってるかは分からないけどね。熟女マニアしか来ないから

そう。ありがとう

いいえ。興味があれば帰りに寄るよう彼に伝えてよ
考えとくわ

「N a s h l e d a n o u .」

「A n o .」

最後だけは俺でも聞き取れる言葉で終わった。

「行こう」カレンは言った。「やな人」

「教えてくれなかったのか？」

「いいえ。生理的に苦手なだけ」

「ここでの暮らしは大変だったろうな」

「まあね」

俺達は二つ隣にあるホテルに入って、階段を上がった。三〇七号室を目指す。

「居そうか？」

「ノックしたら分かる」

俺は裏拳でドアを叩いた。

反応が無い。

もう一度叩く。

「……」

「鍵、開いてるわ」ドアノブを回し、カレンが言った。
ドアを開けた。

床を見ると、土の付いた靴跡があった。

「男ものだ」

「娼婦の部屋なんだから、あつて当然よ」カレンは言った。
靴跡は、行きの分と帰りの分、往復の二種類。

「……ん？」

靴跡の色が、微妙に違う。

「これ、くすんでるけど……」

その時、ベッドを見たカレンが息を飲んだ。

そこには10センチ平方ほどに渡って、血が付いていた。まだ乾いていない。一時間も過ぎていないだろう。

殺されたか？

そこには幾つか違和感があった。

死体が無い。

シーツに皺が無い。

ベッドの脇に転がった消毒用アルコールの瓶と、四角く小さなガ
ーゼ。

何かの推理小説で読んだ事のある状況だ。

「まだ生きてる」

「え？」

俺は確信を持っていた。

「よくある偽装工作だ。駅に行こう」俺は廊下を振り返った。「列車が来たら終わりだ」

俺達は走った。お互い遅れないように手を握りながら。

俺は携帯を取り出した。

「もしもし」神代が出た。

『何だ。えらく息が上がってるな』

「飾り窓に警察を呼んでくれ」

『どうということだ？』

「念の為だ。頼む」

『おいこら、ちよつと待つ』

電話を切った。

駅に着くと、一人の東洋顔の女が改札に入りかけたところだった。
「待て！」

女が振り向いた。カレンの方を見て、一瞬体を震わせ、走り出そうとした。

俺はすんでのところで女の持つバッグを掴んだ。

「『ユカリ』ですね」

女は頷いた。

「日本語は勿論」

「ええ、喋れるわよ。あなた誰なの？」女は日本語で言った。

「友達です。娘さんの」

「何？ 娘って。私独身だけど」

「知ってます。シングルマザーでしょう」

「だから、娘なんて……」

「カレン・ノリソヴァー！ その息子で、あんたの孫、ヨブ・ノリス。

彼が実は生きてる事も知ってる」

女は溜め息をついた。

「何でここに居るって分かったの」

「何故来ると？」

「娘が誰か男と一緒に帰って来てるって、知り合いがメールで知らせてきたからよ」

「あの女か」

「どうして偽装が？」

「よくある手だ」

「そう？」

「ああ。男物の靴跡はあんたが自分で履いて付けた。ベッドの血は見たところ、女が男に行方中に刺されたように見えるが、抵抗し

た跡も、刺されてから悶えた跡も無い。注射器で血を抜いてベッドに撒いたんだろう。場所柄を考えれば注射器は薬物投与する為のもので、それ程大きくもないだろう。繰り返し腕に針を刺した結果傷が広がり、アルコールとガーゼで消毒した。慌てていたからなのか、床に瓶もガーゼも落ちていた」

「OK、OK。全部当たってるわ」

「何故彼女を捨てた？」

「捨てたなんて人聞きが悪いわ。私はあの時渡せるだけのお金を渡して行かせたのよ」

「幾らだ？」俺はカレンに訊いた。

「確か……四七〇コルナね」

「それで生活出来るとでも？ 足掛かりになるバイトを探すのにもどれだけ苦労すると思う」芹沢に言った。「カレン、彼女が持つてるバッグを見た事あるか？」

「私がこっちにいる時には、無かったわね」カレンは首を横に振った。

「今娘が来てる服だって真新しいのじゃない」

「俺が今日買ってやったんだ。久々の再会だからな」

「あの時はあれで全部だったのよ、手元にある現金は。これも客に貰ったものだし」

「手元の現金か。一大決心だった筈なのに、銀行には行かなかったのか？」

「どうしてそこまで言われなきゃならないのよ。そもそもあなた何してる人？」

「日本の大学に通ってるボランティアサークルの部員だ。放っとけなくてね」

「ああそう。ねえ、どこか座って話しようよ。疲れるし、列車も出て、折角買ったチケットもパアよ」

俺達は近くの喫茶店に入った。

メニューいいわ。すぐ出るから 芹沢はウエイトレスに言った。

「それで、どうしてカレンやヨブがこんなことになったかって言う
とね」

彼女は話し始めた。

あれは一九八七年、ド派手でおバカな昭和時代も終わりに近づいていた頃ね。私は騒々しい日常からちよつとだけ離れたくなって、外国に行こうって思ったの。ハワイ辺りの南国なんてブームに流されることだけが取り得の日本人で溢れ返っていたから、もつと静かな所と思って、東欧を選んだのよ。ビザ取って、暫く住もうって決めてね。フランス経由で来たわ。最初はプラハのど真ん中の方に泊まってたんだけど、一週間もしたら飽きちゃってね。うんと郊外に行こうって決めて、列車の旅を続けたんだけど、本当にド田舎まで来て、静かな時間を過ごしていると、ある日クスリを貰ってね。クスリったって抗生物質の類なんかじゃないよ。そう、あっちの方。俗にシャブやらハッパっていうやつ。それからもうドロドロの日々ね。どっぷりクスリにハマっちゃって、抜け出せなくなって、無くなったらお金借りてまた新しく買って。気がつけば娼婦に成り下がってて。たったの四ヶ月で落ちるとこまで落ちちゃったわけ。ええ、たったの四ヶ月よ。バカらしいってならないわね。その内赤ん坊まで孕んじゃって、何度お腹の子と一緒に死のうと思ったか。でももう、なるべくしてそうなったんだって、自分を無理矢理納得させたわ。そしてカレン、あんたが生まれたの。あんな生活してて、何の障害も持たないで生まれたのが奇跡と言っているいわ。一応一生懸命育てただけど、この子ったら、たった一歳であいつに強姦されちゃって、アフターピル買ったり中絶手術するお金なんて無いもんだから、結局この子まで息子が出来ちゃって、もう私は限界だったのよ。どう考えてもこんな年増の娼婦の稼ぎじゃ生活やってけない。クスリだってまだ買ってだし、借金も返さなくちゃいけないかった。どん底の生活は目に見えてたわ。だから、この子達をアタシから引き離れたのよ。そりゃ悪いとは思ってるわよ。でもあなた達が

ここにいたら、物乞いをするところの生活じゃないわ。そこいらのワルにだってまたマワされてズダボロにされてたろうし、あたしもこう年食うとあんた達なんか養えなくなる。仕方なかったのよ。ね、カレン。分かってちょうだい。

芹沢はそこまで一気に話した。

「さあ、言うべきことは言ったわ。他には何かあるのかしら？」

「まあ、今まで大分ぶっ飛んだ人生送ってきたのはよく分かったが」

「それが伝わったのなら言うこと無いわね。粗方経験して今思うのは、何で産んじやっただらうっていうことぐらいよ」

「は？」

「自分はこのいう人生になるし、子供もこんなことになるって分かってた筈なのよ。一大決心？ 別にそれほどには思ってたなかったわよ。望んで産まなかったわが子の行く末なんて興味あったと思う？ ほら、あんた達が知りたい事は全部話したつもりよ。母親面はおしまい。二度とこっちは来ないんでしょう？ さっさと連れて帰って」

「おい、よくもそんな……」

隣を見ると、カレンは震えていた。そして、その状態にシンクロした声で、彼女は言った。

分かったわ、……生まれなきゃ良かったのね。そう、よく分かったわよ

チエコ語で、俺は何度が言った「rozum? m.」という単語しか聞き取れなかった。こみ上げている感情を絞り出しているのに、チエコ語が分からない自分がもどかしかった。

彼女は店を出ていった。

「おい」俺は呼び止めようとしたが、彼女は止まらなかった。

「ほっときなさいよ」芹沢はものぐさそうに言つと、煙草に火を付けた。俺は反射的に鼻をつまんで、周りを見た。

「疲れたわ、本当に」芹沢は肺一杯に煙を吸い込み、鼻と口から同

時にくゆらせた。

「煙を鼻から吐く女は嫌いだ」

芹沢はついと片眉を上げて含み笑いを漏らした。

「あんたみたいな若い客なんかも居ないわよ、この年になると。」

モノが役に立たなくなる寸前の、どこぞの耄碌ジジイとかばかりさ」

そう言った後、今度は声を立てて笑った。

「あいつって誰だ？」俺は言った。

「何？」

「カレンを犯した男だ。あいつって言った」

彼女はまた含み笑いをした。胸クソが悪い。

「教えてあげるわ」

私は追われてるのよ。

芹沢はそう言つて、まだ長い煙草を灰皿に押し付けた。

「何に……」

訊こうとしたところで、ふと外の駅が目に入った。改札を抜けたカレンが駅員の制止を振り切つて、線路に出ようとしていた。

「何してる……？」

俺は店を飛び出し、駅に駆け込んだ。駅員が止める間も作らせずに、カレンを抱き寄せた。

「次の列車は十分も後だぞ。バカな事を」

「私が居なかったら、こんな事にならなかったのよ。私が居たからあなたがこんなところまで来なきゃならなくて、お母さんも腐りきってしまったのよ。何もかも、私が居たからいけなかった。普通の生活をしてるあなたに何が分かるの？」彼女は俺の胸倉を掴み、そこに頭を当てながら言った。

「今君が死んでも、何も変わらない。俺は娼婦街に来たし、君は母親に自分への愛が無かった事を知った」彼女は泣いていた。「それに、君の息子が生きてる事実だつて変わらない」

カレンの手を引いて店の前まで戻ると、中に芹沢は居なかった。

「消えた」

俺は再び電話を掛けた。

「もしもし」

『今度は何だ？ 一応警察に連絡したけど、英語が通じて良かった』

「さっきの通報、間違いだっただと言っといてくれ。今から帰る」

『おい、説明してくれよ』

「帰ったらな」

俺は電話を切った。

秋に近づく風が吹いていた。

旅（後書き）

よければここまでの感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9245/>

Karen

2010年10月13日20時06分発行